

みんないようぎょうしけんきゅう
明代窯業史研究

—官民窯業の構造と展開—

かなざわ よう
金 沢 陽 (出光美術館学芸員) 著

一国の社会経済史の発展段階を考察するにあたっては、実証的研究を蓄積し、そのうえで法則性を見出して理論化し、再び実証的研究によってそれを検証してゆく過程を経るものであろう。筆者が明代史の研究を志した時、中国では資本主義的生産様式の萌芽を指摘できるまでに明代社会経済が発展していたのだとする理論が行われていて、たいへん刺激的に感じた。その一方で、一九五〇年代から六〇年代に盛んに発表されたいわゆる資本主義萌芽問題討論の諸論文が、断片的史料をもって結論を急ごうとする傾向があり、比較の実証面が弱い印象を受けた。この時研究課題として興味を覚えたのは、この理論を実証的に検証してみることであった。当研究はこの興味を発端としている。

本書は、大別して景德鎮官窯の成立・発展および民窯との関係を論じた第一部と、景德鎮民窯の製品市場と他の民窯との市場関係を論じた第二部からなっている。筆者は、明代景德鎮官窯陶磁を主要コレクションの一つとする博物館学芸員の立場から、半ば業務の必要上官窯陶磁について考察する機会が増え、一見商品市場とは別である官窯の動向も含めて、明代の窯業が展開していることを痛感している。一方中国では、一九八〇年代以降の改革・開放政策のもと、それまで人民の歴史とは別のものとしてあまり脚光をあびていなかった景德鎮をはじめとする官窯遺跡の発掘調査が急速に展開している。また急速な経済発展により都市部の再開発が盛んになり、明代の陶磁器消費地遺跡の調査事例も増加が期待される。こうした情勢は、民窯・官窯を含めた考察を進め得る条件を醸成していると言えるであろう。

本書は、現時点までに筆者が把握し得た史・資料——とくに主として文献史料としての地方志史料、および新中国になって著しく発展した陶磁考古学分野の考古資料に拠って、明代中国の官民窯業構造の研究に取り組んだ初歩的な成果をまとめたものである。大方の参考に供するとともに、願わくは多くの批正を賜って、充実をはかってゆきたいと考えている。(著者「前言」より)

お取り扱い

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-7

電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

前言

問題の所在

第一部 景德鎮窯業の展開

第一章 景德鎮に官窯が置かれるに至る過程

第一節 景德鎮発展史

第二節 景德鎮の各代作風の推移

第三節 元代景德鎮「御土窯」——その「官窯」としての性格——

第四節 景德鎮湖田窯焼造の「樞府手」碗に見る元代「官搭民焼」の傍証

第二章 景德鎮官窯の成立

第一節 「官窯」の概念

第二節 元の景德鎮「浮梁磁局」

第三節 明初の景德鎮「官窯」をめぐる諸事情

第四節 宣徳期御器廠成立の意義

第三章 統制期の官窯の動向

第一節 明代前期景德鎮官窯磁器の規範

第二節 「部限瓷器」・「欽限瓷器」について

第四章 明代後期官搭民焼と御器廠の変質

第一節 官搭民焼の研究

第二節 官搭民焼の本格化時期と民窯吉祥文の影響

第三節 落選御用磁器処分方法の変遷から見た御器廠の変質

第二部 明代陶磁市場の発展段階と景德鎮窯業の関係

第一章 明代景德鎮民窯製品の国内流通について

第二章 明代龍泉窯業の展開について

第三章 明代の磁州窯について

第四章 明代福建における民窯とその活動

第五章 明代広東地方の陶磁生産と陶磁市場について

第六章 その他の地方窯について

結語

初出一覧／史料一覧・参考文献一覧／図版・挿図・表一覧

あとがきにかえて／索引／英文要訳

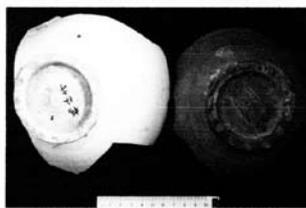
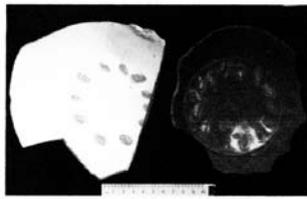
書名 明代窯業史研究
 一官民窯業の構造と展開—
 著者 金沢 陽 (出光美術館学芸員)
 体裁 B5判変形(245×187ミリ)
 上製貼函入り
 カラー図版 24 ページ
 本文 284 ページ
 (挿図 109 図)
 定価 21,000円
 (本体 20,000円+税)
 ISBN978-4-8055-0631-8 C3020
 2010年7月刊行

著者略歴 金沢 陽 (かなざわ よう)
 1952 (昭和27)年 東京都に生まれる
 1977年 青山学院大学文学部史学科卒業
 1979年 同 大学院文学研究科修士課程修了
 1982年 同 同 博士課程満期退学
 2009年 青山学院大学より博士 (歴史学) の
 学位を取得
 1979年4月より 出光美術館学芸員
 現在に至る
 東洋陶磁学会常任委員
 日本貿易陶磁研究会世話人

第1部第1章 景德鎮に官窯が置かれるに至る過程



7 景德鎮市近郊嘉出土の青磁蓮花碗 五代 (大阪市立東洋陶磁美術館「皇宮の磁器—新発見の景德鎮官窯—」大阪市美術振興協会はか、1996より)

8 楊梅亭窯址採集の白磁(左)・青磁(右)碗片
出光美術館蔵

景德鎮で唐末五代に採集した楊梅亭・黄泥頭・石虎湾などの窯では、浙江の越州窯風の器形や釉色の青磁(図7)と同器形の白磁が、いずれも越州窯風の支焼重ね焼き方法で共存していた(図8)。モデルとなった五代呉越国(浙江)の越州窯青磁は「秘色」と呼ばれて宮廷用の最高級陶磁器とされたもので、他の窯がこれをコピーして目標とすることは有り得ることであり、景德鎮も例外ではなかったわけで、この地の特産である白磁の碗なども、この時期は越州窯青磁の模範とわけて類似している。この段階では、景德鎮独自の秀でた作風は確立されていない。これに対応するかのよう、九一十世紀の唐末五代に海外に輸出されたいわゆる「初期貿易陶磁」の代表的な三種のうち、越州窯青磁・長沙銅官窯陶磁(湖南省)の産地が明白なのに対し、白磁は一部の邢窯白磁などを除いて産地が解

景德陶廿三百余座、埴埴之器潔白不瑕、故離于他所、皆有醜玉之称。其視真定紅磁、龍泉青磁、相鏡奇矣。と見えていて、荜折が「陶記」を著したと考えられる南宋後期からの評価として、すでにそれ以前から景德鎮には「三百余座」の窯が操業しており、陶土をもって成形された器は純白で傷が無く、他所に輸出されて「醜玉」「醜州の玉」と称されていたことや、宋代の名窯であった定窯や龍泉窯とその精巧さを競うまでになっていたことが示されている。その製品の評価は、「宋会要輯要」食貨・瓷器庫の条に、瓷器庫に収納して宮廷の御用に供する各地の窯からの貢納品に、明州・越州などのいわゆる越州窯青磁、定州・青州の白磁、汝州・耀州の青磁、鈞州の紫紅釉陶磁、建州の黒釉陶磁などと並んで、越州の青白磁があげられていることから、相当高いものであったと考えられる。